

〔親俊日記〕天文十一年七月卅日戊寅嶋居惣右衛門沈一兩持來之

〔御湯殿の上の日記〕慶長八年七月廿六日かとうかすへ、えんきやらえん上申ながはしより文いづる、

〔異國近年御書草案〕日本國 源家康 謹啓

東埔寨國主 閣下

本邦商人赴其地不可無書故寄愚翰○中於貴邦所懇求者上々品奇楠香也委悉付船主舌頭即今貼金屏風五雙贈進之雖是薄物域中所産也采覽惟幸不宣

慶長拾一年丙午季秋十九日

御印

〔御湯殿の上の日記〕慶長十二年三月十七日ひでよりよりちんのほた、どんす百卷○中女ゐんの

御所みやの御かた女御の御かたへも色々参る、

〔常山紀談二十一〕木村長門守重成が一陣、鎗の鍔を揃へて待かけたれば、川手○主水を突伏たり、

○中菴原○助右鎗のえほ首を握り○中木村が首を御前に出すに、髪にたきまめし奇南香の薫

せしかば御感あり、木村が背は四方白にて鍔形の立物打たり、

〔百一録〕延寶二年九月十八日永井伊州○伊賀参内、法皇新院女御御方へ被参、禁裏様○靈へ從、大

樹○徳川伽羅○徳川二木、縹子十卷、銀百貫目被獻○中法皇へ縹子五卷、伽羅一木進上云々、

〔槐記〕享保九年十一月廿四日、伽羅ハ蠻國ノモノ也、本唐ニテハ攝楠ノミ也、星槎勝覽ニ見エタリ

ト仰○近衛照○近衛ラル、

〔倭名類聚抄十二〕淺香 南州異物志云、沈香其次在心白間、不甚堅者、置之水中、不浮不沈、與水平者、名曰淺香也、